

# 食生活行動が地球環境に与える影響 —食生活行動に伴う CO<sub>2</sub> 排出—

柴田学園大学フードマネジメント学科

日景 弥生



TEL 0172-33-2289

e-mail y-hikage@shibata.ac.jp

キーワード

食生活行動、二酸化炭素排出量、地球環境

筆者はこれまでいくつかのジャンル（衣類洗淨・家庭科教育学・ジェンダー平等・生活環境）における研究を行ってきた。ここではフードマネジメント学科で扱う予定の研究内容について紹介する。

日本は、2021年地球温暖化対策推進本部の決定を踏まえ、米国主催気候サミットにおいて、2050年に2030年度に温室効果ガスを2013年度比で46%削減を目指すことを表明した。温室効果ガスのうち二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）は約76%と最も高く、とりわけ日本では約90%と高率である。そのため、地球温暖化防止、すなわち温室効果ガスを削減するには、CO<sub>2</sub>排出量を減らすことが重要である。一方、家庭におけるCO<sub>2</sub>排出量は、近年は減少傾向にあったが、新型コロナウイルス感染症による家庭滞在の長時間化などにより2020年度は前年に比べ増加している。

そこで、家庭における食生活行動がCO<sub>2</sub>排出量に与える影響を明らかにするために、青森（寒冷地）、東京、鹿児島（温暖地）における食生活行動にかかるCO<sub>2</sub>排出量を、モデルメニューを設定し、季節や、食材の入手から廃棄までの各段階におけるCO<sub>2</sub>量を試算した。

その結果、次のことが明らかになった。1.CO<sub>2</sub>排出量は、地域により、また同地域であっても季節により異なることがわかった。2.CO<sub>2</sub>排出量は、調理や廃棄等より食材量の輸送距離に影響され、例えば、年間を通して輸送距離の変動がわずかな東京は、CO<sub>2</sub>排出量は他地域に比べ少なかった。またCO<sub>2</sub>排出量は、鹿児島は夏（7月）が、青森は冬（1月）が高くなった。これより、地産地消は環境視点からCO<sub>2</sub>排出量削減に有効な方法であるといえる。



また、筆者らの「CO<sub>2</sub>排出量と官能検査を考慮したハウレンソウのゆで水量の検討」では、CO<sub>2</sub>排出量は、調理時間や調理器具に関連することも分かっている。

家庭から排出されるCO<sub>2</sub>のエネルギー源は、電気>ガス（都市ガス+LPガス）>灯油の順（環境省、令和2年度家庭部門のCO<sub>2</sub>排出実態統計調査結果の概要（確報値）、2022年3月）であるが、地球環境への影響と近年のエネルギー高騰による家庭経済への影響も考慮した生活経営が望まれる。